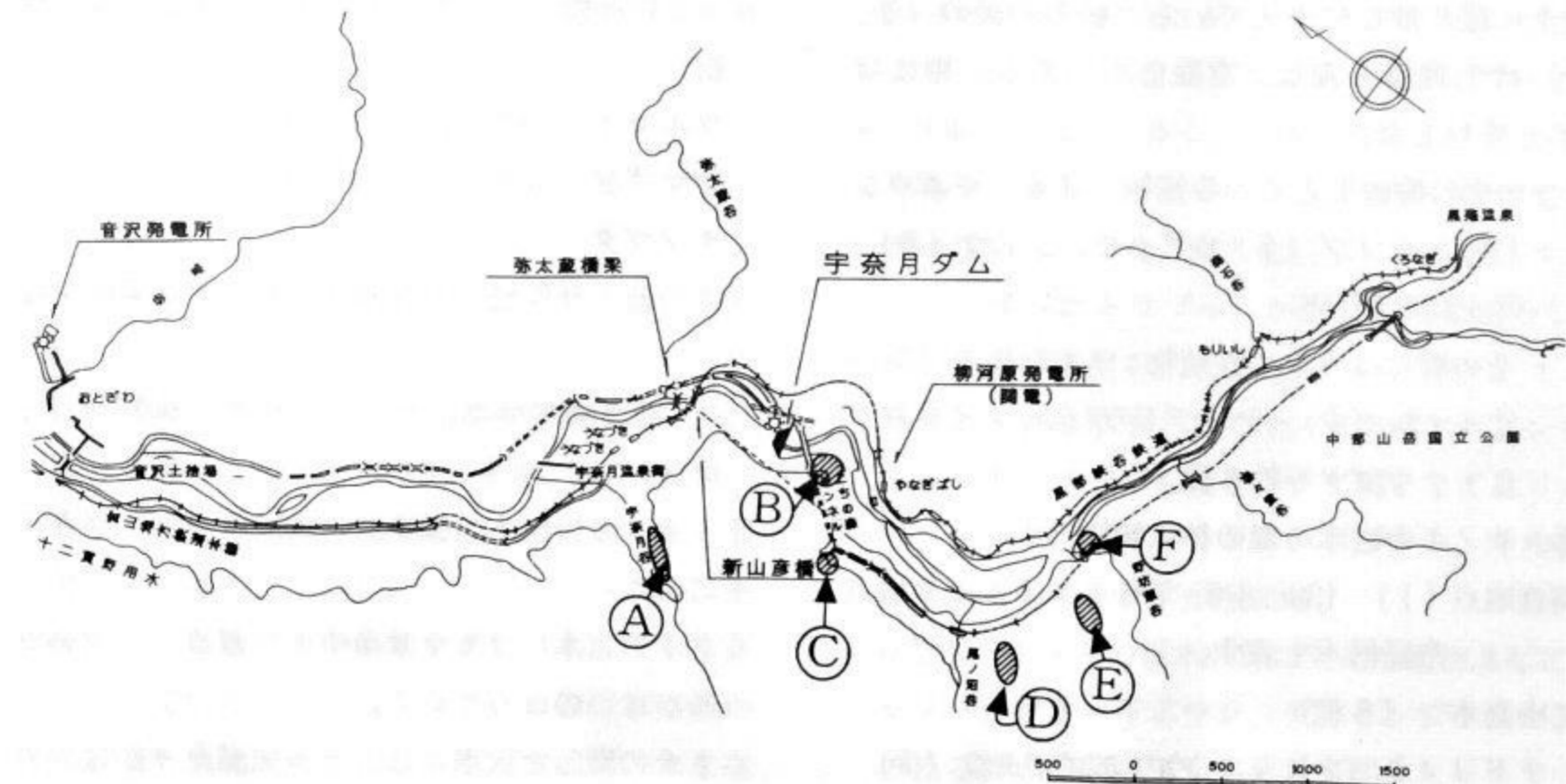


宇奈月ダム上流のトチノキの林について

若林 一成 938-0864
宇奈月町栃屋 530

Some Comments about the Vegetation of Horse Chestnut Forest on Upper Part of Unazuki Dam, Toyama Prefecture

Issei Wakabayasi 530 Tochiya Unazuki machi, Toyama, 938-0864 JAPAN



1. はじめに

私は平成7年度より、宇奈月ダム環境巡視員として、ダム周辺の植生の調査にあたった。その時得た観察資料を基にダム周辺のトチノキ林についてまとめた。

2. 調査目的

宇奈月ダム上流周辺に多い「トチノキの林」の生育状況を把握し、その保全に役立てる。

3. 調査箇所

(1) 柳河原左岸山腹標高約350m~450mの範囲に広くトチノキの林が自生している。一部は

降雪期には雪崩の多発地帯となる沢で分断されている。今回は引湯管路7号トンネル上部のトチノキの林のみを1998年8月8日に調査した。

(2) 宇奈月ダム堤体少し上流の湖面橋左岸上流の山腹、標高約250m~350m範囲に大きな「とちの森」がある。今回は湖面橋左岸斜面下部のトチノキ林を1998年9月9日に調査した。

4. 結果

(1) 柳河原左岸山腹(引湯管路7号トンネル上部)のトチノキ林の植生(図1のD, 図2)



図2 柳河原左岸引湯管路7号トンネル上の「とちの森」(H10年5月17日)

①トチノキの巨木の様子

胸高径約150cmのトチノキが山腹に7本程、直線上に縦に並んで生えている。種名の後の(多, 少)は生育量を表し、常緑低木であるものには(△)を付した。

- ・その幹に生えている植物: オオバギボウシ(多)・シノブ(多)・ダイモンジソウ(多)・等主に3種。
- ・その幹にはうツル性植物: ツルマサキ(多)・サルナシ(少)・ヤマブドウ(少)・イワガラミ・ナツツタ等約5種。

②トチノキの巨木の森の林床植物

調査地点(1) 1998.8.8. 7号トンネル上D地点
△は、常緑低木を表す。

<小高木>(5種)

チドリノキ(少) ウワミズザクラ(少)
ヤマモミジ クサギ ニガキ

<低木>(14種)

オオバクロモジ(多) ユキツバキ(群生)(△)
チャボガヤ(多)(△) ハイイヌガヤ(△)
ヤマアジサイ(多) ウリノキ(多)
タマアジサイ(多) コマユミ(少)
シナノキ(少) バイカウツギ(少)
ヒメアオキ(少)(△) メグスリノキ(少)
ムラサキシキブ マルバマンサク

<草木>(8種)

ミヤマイラクサ(多) ミズヒキ
ナルコユリ キンミズヒキ
トチバニンジン(多) トリアシショウマ
ノササゲ テンニンソウ(多)



図3 湖面橋左岸の「とちの森」の林床(H10年9月7日)

<シダ類>

ジュウモンジシダ(多)

<つる性植物>(トチノキにはいのぼっていた植物)

ツルマサキ(多)(△) サルナシ(少)
ヤマブドウ(少) イワガラミ
ナツツタ

③その他…今年はこの森ではトチノキの実が少ない。

(2) 湖面橋左岸のトチノキ林の植生(図1のB, 図3)

①トチノキの巨木の様子(H10. 11. 24 調査メモによる)

- ・トチの古木にツルマサキやイワガラミの太いツルがはいのぼっている。
- ・トチの腐った大木には、ツルアジサイがはいのぼり、樹冠を覆う。
- ・トチの大木にフユツタが実をつけ茂る。

②「とちの森」の植相について

・高木層: トチノキ(巨木6本)・サワグルミ(大木1本、高木1本)等2種。

調査地点(2) 1998.9.7B地点

<小高木>(6種)

ヤマモミジ(多) チドリノキ(多)
ヒメヤシバシ(少) クサギ
フサザクラ ミズキ

<低木>(16種)

チャボガヤ(多)(△) ハイイヌガヤ(多)(△)
ヒメアオキ(少)(△) ハナイカダ(少)(△)
ユキツバキ(少)(△) エゾユズリハ(少)(△)

コマユミ ヤマアジサイ(多)
ウリノキ(多) ヤブデマリ
アカメガシワ モミジイチゴ
ムラサキシキブ サンショウ
タラノキ オオバクロモジ(多)

<草木>(6種)

ノササゲ イノコズチ
アカソ(群生) カラムシ
ノブキ テンニンソウ(群生)

<シダ類>

シノブ シシガシラ(少)
リョウメンシダ(多) イノデ
コタニワタリ

<つる性植物>(トチノキにはいのぼっていた植物)

ツルマサキ(△) イワガラミ
ツルアジサイ フユツタ(△)

5. 考 案

(1) トチノキの生育条件

- ・トチノキは純林を構成する性質を持っている。実は大きく、たくさん実り、発芽、生育もよい。ただし、他の雑木や雑草によって日陰になると発芽しても生育しない。
- ・トチノキは数百年の樹齢を重ねる巨木になる性質を持っている。それ故、トチノキの巨木は僅か6本でも広範囲にわたって樹冠を上げ、大きな「とちの森」を形成する。
- ・宇奈月ダム周辺の標高約250~550mでは自然環境としてトチノキの生育する好条件を備えている。
- ・宇奈月ダム下流にも、それより上流にも大きな「とちの森」はない。特に黒部峡谷鉄道終点の樺平(標高600m)周辺にはトチノキは生えていない。また、下流の黒部川扇状地の里山にもトチノキは余り自生しない。勿論、「とちの森」はない。
- ・トチノキの生育条件として、ある程度の深い土壌(砂礫、そして腐葉土)が必要で、急斜面よりもやや緩斜面がよいようだ。但し、平坦地では、大木は見当たらない。水はけも必要のよう

である。そして、南向きの山腹よりも北向きの山腹に大きな「とちの森」がある。

- ・トチノキが巨木となるには、ある程度の大きい石が土壌に混ざることも大切なようである。トチノキの根は大きい石を抱えて、巨木の重量を支える。

(2) 「とちの森」を構成する植物

- ・トチノキは大きな葉をし、林床を夏場は覆うが、春や秋には、葉はない。その時期に落葉広葉樹のチドリノキなどの小高木やヤマアジサイ、オオバクロモジなどの低木が日光をとると考えられる。但し、トチノキの巨木の樹冠の下には常緑樹の低木が割りに多い。その内、チャボガヤ、ハイイヌガヤが特に多く、ヒメアオキ、ハナイカダ、ユキツバキ、エゾユズリハも生えている。
- ・ツル性の低木も多く、巨木の幹にイワガラミ、ツルマサキなどがはいのぼり、薄暗い樹幹でも茂っている。また、腐ちた巨木になると、ツルアジサイ(ゴトウヅル)が樹幹に根をおろし、トチの樹幹に茂る。
- ・林床に生える草本としては、トチバニンジンをよく見る。ノブキも見ると。シダ類としてはリョウメンシダ、ジュウモンジシダが多い。その他にもいろいろなシダが生える。
- ・苔むすトチノキの巨木の幹に生える植物として、シノブ、オオバギボウシ、ダイモンジソウが日の当る幹の表面によく生える(図4)。

(3) トチノキの効用

- ・宇奈月町の山村では、昔からトチの実を飢饉時の備蓄食料として大切にしていた。また、トチノキは、ブナのような極端に実のなる年とならない年は殆どなく、いつの年でも沢山、大きい実をつける。

トチの実の苦みをぬき、トチ粥、トチ餅にして、主食の米と共に食べた。水田の少ない山村ではアワ、ソバに次いで大切な食料であった。それ故、トチノキを「殿様の木」として大切に、伐採しなかった。

- ・トチノキは材が大きく、重いため、昔は餅つきの臼に利用した。また、トチノキの多い黒部峡谷の山村には昔はトチノキの材を利用して、食



図4 柳河原左岸「苔むすトチに生えるオオバギボウシ」(H10年8月8日)

器の「お椀」や「御膳」を作る木地師が住む部落もあったという。

今はトチノキの大木は材が大きく、白くきれいなため、個人の趣味として、テーブルにしたり、ベンチにしたりしている。

- ・また、トチの花咲く時期になると、トチの蜜をとりに養蜂業者がミツバチの巣箱をもって、宇奈月スキー場に来る。
- ・将来は、トチの木の秋の紅葉のよさ、花の豪華な美しさで宇奈月ダム周辺を飾り、観光資源として考えてもよいように思われる。

6. おわりに

今後も今回のまともを足掛かりに、これらのトチノキ及びその林をよく観察し、不備な点を補充していきたいと考えている。そして、調査の妥当性と正確さを期したく思っている。

(4) 主な参考資料

- 山溪カラー名鑑「日本の樹木」
北陸館「牧野新日本植物図鑑」
家の光協会「原色 コケ・シダ」
平凡社「日本の野生植物(草本)」
平凡社「日本の野生植物(木本)」

オランダの自然科学系博物館を訪ねて

布村 昇
富山市科学文化センター 939-8084 富山県富山市西中野 1-8-31

A Short Trip to the Netherlands, Especially to the Natural History Museums

Noboru Nunomura・Toyama Science Museum, 1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama-shi Toyama, 939-8084 JAPAN

私は、今まで30年近く等脚目甲殻類(ダンゴムシ、ワラジムシなどの仲間)を研究してきた矢先、海外での先達や同業者に直接会って専門的な議論をしたことがほとんどなかった。彼らと日本の等脚類について紹介し、議論したいと思っていたが、その機会が訪れた。1998年7月、オランダのアムステルダムで第4回国際甲殻類シンポジウムが行われ、世界中の甲殻類を研究者の集いを機会に先だって等脚類の研究集いがもたれたのである。等脚類もまた、エビやカニと同じ甲殻類の一員である。

朝10時半に関空を出、午後3時にスキポール空

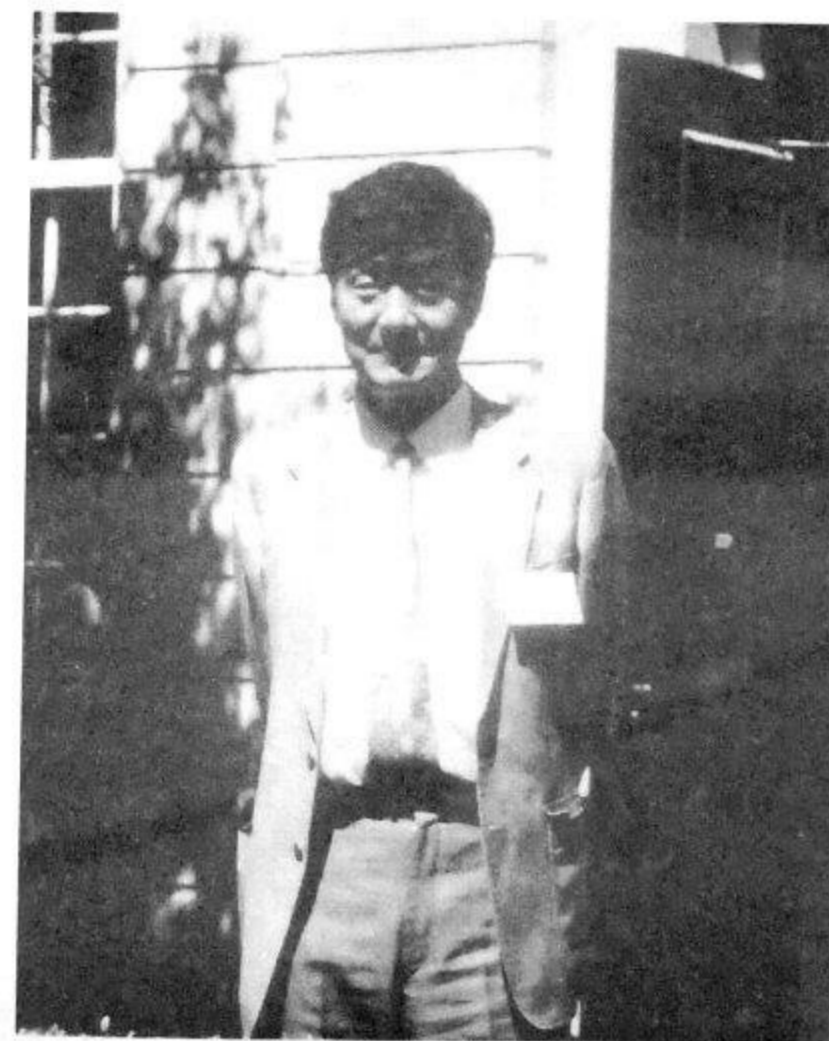


写真1
とりあえずアムステルダム大学に到着

港につく。国鉄に乗り、アムステルダム中央駅に着き、ホテル部屋に荷物を放むやいなや、会場のアムステルダム大学に走るが、この大学は有名な分散型校舎で、会場がなかなか分からずあせる。地図と表札をにらめっこし、近くの人に聞くが分からない、オランダ語ができないので、英語で聞くしかないが、何とか目的地見つけ、時間ぎりぎりに同じ等脚類を研究する仲間と会えた。手続を終え、ワインとサラダで乾杯。

翌日から、研究発表が行われた。ヨーロッパとアメリカ東岸それにブラジルなど大西洋岸の人が多いため、話の中心は地中海を含む大西洋が中心である。私の話の日本を含めた西太平洋のことは彼らにとって「見知らぬ土地」と言うことで興味を示してくれるが、ほとんどの学者が来たことがない地域であるだけにつこんだ議論をすることが難しい。特に日本のワラジムシ相の形成については、多くの種類がここ100年以内に、欧州からの移入種であることが一つのポイントであったが、19世紀半ばまで日本が鎖国をしていたことさえ、誰も知らないで、動物学より歴史の話をしなくてはならなかった。日本産ワラジムシの分布の特性を考える上で、移入種であるオカダンゴムシやワラジムシなどが最優占種であり、その歴史は大切である。

さて、昼の研究発表が終わって夕方5時や6時といっても真昼のように勿論明るいし、夜10時でもまだ明るいのはびっくりした。北緯52度といえばサハリン北部と同じなのであるから、当然なのだろう。したがって毎日各国の研究者たちが三々五々喫茶店やレストランで専門的な話や各国の話